九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 **No.312**

2018（平成30）年 3月11日（日）発行

■**「はらまち九条の会」**とは、戦争放棄の憲法第９条を護って「戦争をしない国・日本」をめざし、支持政党などを問わない自由な市民の会です。どなたでも、どこに住んでいても入会できます。何の拘束もなく、匿名でもけっこうです。

■結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に420名。年会費千円。

■3.11の大震災後、**「事故の福島第一核発電所（原発）に世界一近くで活動できる“九条の会”」**を自覚し、**「日本国憲法の草案を起草した憲法学者、鈴木安蔵（小高区出身）の故郷の“九条の会”」**を誇りに活動しています。

＜2018年度 総会のお知らせ＞

ご出席をよろしくお願いいたします

6月17日（日） 午後1時～3時30分

○会場：原町区 JR原ノ町駅前 南相馬市中央図書館マルチメディアホール

①「はらまち九条の会」総会 午後1時～2時 会員のみ

活動・会計報告、活動計画・予算審議、役員改選、質疑応答など。

②広瀬 隆講演会 午後2時～3時30分 一般市民の入場歓迎

演題 『日本列島の全原発が危ない』

○3．11の大震災、特に東電福島第一原発事故のため、私たち南相馬市民は地震・津波・原発事故・風評被害の四重苦に、現在も翻弄され苦悩を強いられてきました。そこで今年は、半世紀以上も前から放射能や原発の危険や恐怖を訴え続けてきた、作家でジャーナリスト広瀬 隆さんの講演会を開催いたします。

＜広瀬 隆ひろせたかしさん＞ 作家、ジャーナリスト。1943年東京生まれ。早大理工学部卒業後、大手メーカー技術者。医学書・医学雑誌翻訳業を経て執筆活動に入る。

著書に『ジョン・ウエインはなぜ死んだか』（文春文庫）、『東京に原発を！』（集英社文庫）、『眠れない話・刻々と迫りくる日本の大事故』（八月書館）、『赤い楯』（集英社）、『世界石油戦争』（NHK出版）、『原子炉時限爆弾・大地震におびえる日本列島』（ダイヤモンド社）、『福島原発メルトダウン』（朝日新書）、『東京が壊滅する日・フクシマと日本の運命』（ダイヤモンド社）など。

▲昨年11月の新刊『日本列島の全原発が危ない！』 デイズジャパン ￥2,322

この本では、①超巨大活断層の「中央構造線」が動き出し日本の全原発が危機に陥っていること、②大地震や原発事故で住民は本当に避難できるのか、③使用済みの核燃料や東海村と、下北半島の活火山や大津波、三沢基地の危険性で六カ所村の再処理工場が抱える「世界消滅の危険性」。また福島第一原発3号機は核爆発だったなど、無知や無関心ではいけないと思い知らされます。

○立憲民主党など野党4党が3月12日、「原発ゼロ基本法案」を国会に提出。南相馬市は2015年3月25日に「脱原発都市宣言」を表明し、原発ゼロは原発事故被災民の悲願です。

◆5月12日（土） 13:30～16:00 ・福島市県文化センター2階 ・資料代500円

上智大学教授中野晃一講演会 演題「安倍改憲をとめる市民の広がり」

No.312

自由な作風・反戦平和と護憲の俳人 金子兜太さん98歳で逝去

▲2014年11月30日、震災お見舞いのため福島市の愛弟子中村晋さんを訪ねた金子さん。中村さんの勤務校・福島西高校文芸部の生徒たちと。

2月25日14時30分から、Eテレで金子さん追悼の1時間特集番組があり、中村さんや生徒たちとの楽しい会話の様子も放映されました。

「感性」でとらえる 追悼 金子兜太

福島市 中村晋

弟子として、金子兜太から学んだことは数えきれない。戦争のこと、戦後のこと、俳句のこと、俳句論争のこと。しかし、私が最も学んだことは「感性」ということだった。

本当に大事なことは、理屈じゃない、感性なんだ、いのちを体で感じることなんだ・・・金子兜太はいつもそのことを生き方として私たちに示していた。俳句作品はもとより、戦争体験の語りによって。「アベ政治を許さない」の揮毫によって。常に社会との関わりを意識し、反骨精神を貫いていた。

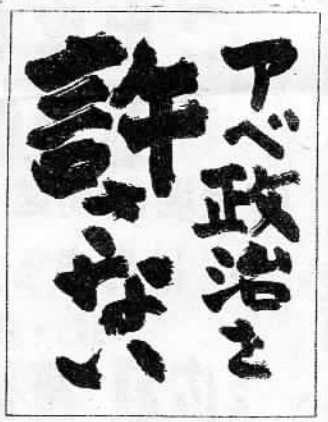
外見とは異なり、決して豪傑などではなかった。むしろ繊細な人だった。とはいえ、句会で私たちが自らの意見を述べるとき、それを聞く先生の姿には威厳があった。腕を組み、目を瞑り、私たちの声の中に潜む本当の言葉を探っていた。「感性」で言葉を聞いていた。

九八歳永眠。金子兜太は、目を瞑り、「感性」とともに、普通では聞き取ることのできない大きな言葉を探りに行ったのだと思う。

（中村晋さんは、「はらまち九条の会」会員）

■戦後日本を代表する前衛俳句運動の中心、反骨、反戦と平和の行動の俳人金子兜太（かねことうた）さんが2月20日、９８歳で死去されました。私たちの九条の会とともに“護憲”を主張されていた方です。

■埼玉県生まれ。加藤楸邨（しゅうそん）に師事。東京帝大卒、日本銀行に入行。海軍中尉として南洋トラック島の戦地で死に直面した極限状態を体験。終戦を迎え日本銀行に復職。季語は認めつつも社会性のある俳句に取り組まれました。



▶2015年、安全保障関連法案反対のため、澤地久枝さんの依頼で揮毫。漢字使用はもったいないとあえてカタカナで書く。

被災地フクシマを気遣う

■戦後、日銀の組合運動で福島市、神戸、長崎に10年間飛ばされますが、特に福島への思い入れも強く、震災と原発事故に心を痛めていました。その作品に、

被曝福島米一粒林檎一顆を労（いたわ）り

（福島の人々は収穫した米やリンゴをひとつひとついたわりながら生活している）

『相馬恋しや』入道雲に被曝の翳（かげ）

（相馬民謡で避難者の帰れない思い、真夏の野馬追祭の入道雲にも被曝の怯えが）

■晩年に「戦争は飢餓との戦い。美談でもなく、ただただ悲惨なだけ。戦争に反対することが自分の最後の仕事」と話し、憲法9条のこんな句も残されています。

九条の緑陰の国台風来（くる）

○追悼文を書いていただいた**中村晋さんについて。**○1967年生まれ。福島県立高校の国語科教員。震災時福島市内の高校に勤務し、子どもたちとともに、また一児の父として放射能に苦悩した。その窮状を俳句や歌に託し、さらに朝日新聞「声」に投稿し約10篇が掲載されて全国で反響をよぶ。

「春の牛空気を食べて被曝した」　「ひとりひとりフクシマを負い卒業す」

「被曝検査受けねば避難受けつけぬと雨を濡れ来し親子帰さる」

「被曝の日々を振り回されし転校生模擬面接で夢語り泣く」

○中村晋・大森直樹著『福島から問う教育と命』（岩波ブックレット￥560E）には、原発事故直後、福島の学校現場の深刻な影響、生徒たちや教員の苦悩が克明に記録されていて、高い評価を得ています。金子氏に賞賛された中村さんの俳句、歌、新聞投書など、読み応えがあります。